

アジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山市）が、コソボ紛争の難民支援を始めてから約一年になる。昨年六月の和平協定後、アルバニア系住民のコソボ自治州への帰還はほぼ終わったが、氷点下20度にもなる厳しい冬を越すのに精いっぱい、人々の暮らしは依然として苦しい。各国の民間活動団体（NGO）が資金不足などを理由に相次いで撤退する中、AMDAの取り組みは「緊急支援」から「長期支援」に移行、活動を継続していく構えだ。（岡山支局 阿利 明美）

## AMDAのコソボ支援

AMDAが緊急救援チームを派遣したのは、同年四月四日。北大西洋条約機構（NATO）の空爆開始直後で、アルバニア系住民がこぞって近隣諸国に逃亡し始めたころだった。医師や、国連機関などと折衝したりする調整員を送り込む一方、現地でも医師を募るなどして医療活動に携わった。その約一か月後、難民とともにコソボ自治州に「帰還」し、山村など三箇所診療所を開設。医療面だけでなく、住民に焼き立てのパンを配ったり、子供にクレヨンで絵を書かせて精神的なケアにも心を配ったりした。現在、現地又

タッフ九人と日本人調整員一人が活動を続けている。昨年六月から約半年間、現地で調整員兼看護師として過ごした近藤麻理さん(38)によると、すべてが焼かれ、死臭が漂っていた自治州内の町では、各国のNGOが、冬場を迎えて壁だけになっていた石造りの家に屋根を取り付けた。しかし、それだけで寒さをしのげるはずはなく、人々はコップの水

## 視点・直言



コソボ難民の子供を診療するAMDA日本人医師

が凍ってしまうほど冷えきった部屋の中で耐え忍んでいた。風邪が蔓延し、免疫力が弱まった子供を中心に重症患者が急増。壊された診療所を再建することも、医薬品の配布にも取り組む計画だ。

診療所には一日で五百人が訪れ、スタックは寝る間もなく働いたという。現地の復興は、朽ちかけた病院やホテルなどが、資金が底をについて引き上げると表現、命の危険や肉親との別れも増えてきた。しかし、昨春来、連日紙面をにぎわせていたコソボ報道は収まった。だが「ようやく冬を越しただけ」を越しただけ、復讐はまだ。MMDAなどを通して「あなた方のことを忘れていない」という意思は今後も必表示をすることだろう。人は「だれかが気にかけていてくれること」が大きな支えになるのだから。

AMDAが決めた長期的な取り組みは目立たない、地道なものだ。しかし、「金を出すだけ」「現地のニーズを考慮していない」と批判されがちな日本の支援の中で、彼らの活動は、最も人顔が見える支援になっているのではないだろうか。現に、外国のNGOがコソボから「撤退」する中で活動するAMDAの評価は高く、それが日本に対する好感にもつながっているという。

AMDAの活動ぶりは、草の根レベルでの国際交流の在り方を示している。それだけに、非営利組織（NPO）に寄付した個人・団体に一定の所得控除をする優遇税制の導入や、自分の生活を顧みず長期間にわたって活動を続けた人たちの職場復帰に対する支援といった受け皿作りを充実させるべきだろう。それが、結果的に国際貢献につながるのには間違いない。

# 帰国後の受け皿充実を

コソボ支援の募金は、郵便振り込みで口座番号012500・2・40709、通信欄に「コソボ」と書いて「AMDA」へ。